自由南アフリカの声
Voice of Free South Africa

2017 年２月

No. 69

～１冊の本が人生を変える～

発行　／　アジア・アフリカと共に歩む会

Together with Africa and Asia Association (TAAA)

２０１７年２月の報告と予定

■　７月～２月　南アにて図書・学校菜園・サッカー支援活動など。図書研修会、有機農業研修会、農業塾。国内にて、英語の本などを収集、分類・再梱包作業
■　８月　TAAA 代表、南アを訪問
■　９月　４６４箱（英語の本 16729 冊、算数セット 126、ボール 85）を南アに発送
■　１２月　TAAA 南ア代表一時帰国・報告会
■　３月　TAAA 代表、南アを訪問

目次

・菜園と図書の活動を通してできた信頼関係（平林薫）　・・・・・・・・・・・・・２
・視察訪問からみえてきた TAAA のこれからの役割（久我祐子）・・・・・・・・・６
・生徒たちの書評や本の紹介　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８
・TAAA の本の梱包作業・絵本のシール貼り活動に参加して（三井住友 CSR）・・１０
・活動日誌　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１
・寄付金や本などを下さった方々　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２

シャヴカ保育園で子どもたちと畑づくり

菜園と図書の活動を通してできた信頼関係

平林 薫（TAAA 南ア事務所代表）

農業塾のトレーニングコースを開催

JICA 草の根技術協力事業で昨年 7 月に開始となった地域住民への有機農業指導は、指導員及び関係者の熱意と、事業への参加者の積極的な活動により、ここまで順調に進んでいる。コロコロ地域のムタルメ小学校の敷地内に設置された農業塾では、8 月末から 12 月初めまで 2 回のトレーニングコースを開催し、地域の若者 41 名が修了、それぞれの家庭菜園で有機野菜作りを始めた。トレーニングコースは火曜日から木曜日で 7 週間、計 21 日間に有機農業の基礎的知識と技術を指導する。特に“何故有機で畑作りをするのか”、を一緒に考え、実体験しながら学べるような環境作りを心掛けている。

農場塾トレーニングコースの授業風景

玉ねぎの移植法を教える

話し合い重ねて農業塾の準備

事業開始前に指導員 3 名を決定し、カウンターパート省庁や団体の担当者を含めた関係者会議を行い、事業内容の再確認と活動の進め方について協議した。事業開始後、まずムタルメ小学校の 2 教室の改装と敷地の整備に取り掛かり、同時に指導員とトレーニングコースの内容、日程等について話し合い、指導用マニュアルを作成した。コロコロ地域のクリニックや学校にパンフレットを配布したり、地域出身の指導員が知り合いに話をしたりして、トレーニングコースへの参加を呼び掛けた。

トレーニングコースでは、前事業のムタルメ菜園グループのリーダーとして活躍したンギディ氏にも講師として協力してもらっている。すでに有機農業のベテランと言える氏は、主に実地指導や講義開始時と終了時のお祈りを担当してくれる。また、教室内でも黒板に上手な字や具体的な絵を描きながら講義を行っており、氏の能力の高さには驚かされるばかりだ。若い受講生たちもンギディ氏を大先輩として尊敬しており、氏の話に熱心に耳を傾けている。

畑作りのスキルと有機農業を学ぶ

有機農業塾での第 1 回有機農業トレーニングコースは 8 月 30 日にスタートし、10 月 13 日には 26 名が優秀な成績で修了証書を手にした。翌週から第 2 回コースを開始し、12 月 1 日には 15 名が卒業となった。参加者全員がエナレニ農場での研修を受け、訪問後のアンケートでは“畑作りのスキルだけでなく幅広く有機農業について学べた”という

赤ちゃんと共に受講して農業塾卒業証書を手にしたスリンディーレさん

意見が多かった。男性の参加者の１人は、“現代社会では自分たちの手で食糧を生産したり、動物を飼育したりすることを誇りに思わなくなり、何でもスーパーでお金を払って買うことに依存していることはズールー人として恥ずかしい”と書いていた。卒業時に 2 種類の野菜の種を配布し、卒業生は自分たちの力で有機家庭菜園作りを始めている。また、数名が現在協同組合設立に向けた話し合いをしており、指導員も参加してサポートを行っている。

有機農業に関わる若者たち

卒業生のほとんどは 20－30 代の若者で、地域の失業率などからある程度理解はしていたが、これほど多くの若者が定職を持たずに地域内に残っていることに大きなショックを受けている。農業塾での活発な授業から、１人１人が様々な能力、可能性を持っていることが明らかになったが、その力を発揮できる場がないという過酷な現実を目の当たりにした。だからこそ、自分たちの手で食糧生産をすることの重要性と、できるだけコストをかけずに安全で栄養価の高い食糧を生産できる有機農業の有効性を認識してもらい、“みんなの力で地域を有機農業で盛り上げよう”と訴えている。畑作りは好き嫌いや実行力に個人差があるとは思うが、広い意味での有機農業に関わる若者が増えていくことを期待している。

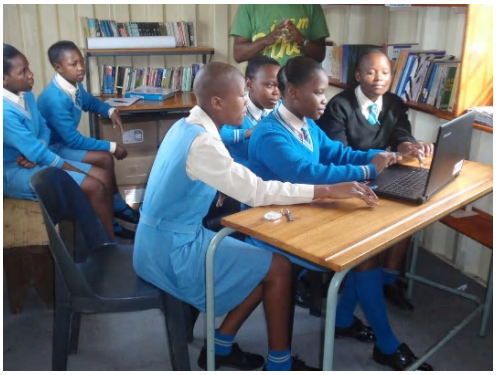
伝統的生活や作物についても学ぶ

コースの授業では伝統的生活や作物、環境保護に関する指導や情報提供に努め、有機農業は地域の人たちにとって全く新しいものではなく、昔の人たちが自然と共存して生活していたころの知恵に少し現代的な方法を取り入れたものだということを理解してもらうようにしている。地域の人たちが昔から持っている、自然や他人に対するリスペクト（敬意）を若い人たちにも今一度認識してもらおうという取り組みなのだ。伝統的生活や作物については、指導員のボングムーサさんのお父さんに講義をしてもらっている。グメデ・ファミリーは地域内で伝統的習慣を守って生活している大きな家族で、ボングムーサさんの兄弟姉妹や親せきの若者も農業塾のコースに参加した。将来、地域の有機農業促進には欠かせない人材である。環境保護の授業では、カウンターパート団体である州環境省のザマ氏から講義を受けたり、一緒に土地固有の木を植樹したりした。また、枯れ草やリサイクルのビニール袋などを利用してマットやかごを制作している地域の年配女性からも技術指導を受けた。（写真:左）

“有機農法なら続けられる”との声

事業では農業塾がベースとしているコロコロ地域と、より山間部に位置するトフェット地域の住民への有機農業指導も行っている。前事業で学校菜園を行ったトゥルベケ小、シャバ小の校長を通して地域リーダーと話し合い、地域住民に呼びかけて研修会を開催し、これまでに 123 名が参加して個人やグループで畑作りを行っている。メンバーは圧倒的に女性が多いが、地域リーダーの男性たちが率先して活動を行ってくれていることが頼もしい。中には以前、化学肥料や農薬を使用した農法で畑作りを行ったが継続できなくなってしまったメンバーもおり、“有機農法なら続けられる”との声が聞かれる。コロコロでもトフェットでも、まず地域の人たちが自分たちの手で作物を生産し、自分自身や家族が収穫物を利用して、“有機栽培をしてよかった”と実感してもらうことがスタートだと考える。

図書活動の中でパソコン技能習得



ボングヅワネ高で IT 訓練を受ける生徒たち

昨年 3 月より開始となった外務省 NGO 連携無償資金協力事業での図書活動は 2 月末で初年度が終了となる。今年度から始まった IT 指導プログラムは、12 月の学年末までに対象校 10 校で 320 名が基礎知識の習得と実地訓練（履歴書作成）を完了して、修了証書を手にした。学校によっては最終学年である 12 年生を優先して IT プログラムに参加させ、進学や社会に出る際のスキル習得につなげることができた。実地は図書室でノートパソコン一台を用いて行うことから、参加生徒をグループ分けして順番に行った。ここで図書委員会メンバー生徒が大活躍し、司書教師と共にノートパソコンの管理や他の生徒への指導をする姿が見られた。一台をみんなで大切に使うことは、学校にとって管理がしやすく、また生徒間のコミュニケーションや学び合いにもつながった。IT 技能習得は現代社会においてますます重要になってきているが、事業ではまず学校図書室の充実と図書活動の定着が最優先であり、生徒が本を活用し、読書を楽しみながら学べる環境作りを継続して行っていきたいと考えている。

3 月からの新規事業では、今年度のセカンダリー10 校と同様に、活動が定着しているプライマリースクールの図書室にもノートパソコンを設置してリソースセンターとし、図書活動の一部として高学年に IT 指導を行う活動が加わる。また、プライマリー低学年生徒に対してバイリンガル教育を行う中で、算数セットを利用して言語と算数能力の向上を目指す。

コンテナー図書室とブックボックスの貸し出し

ちょうど 1 年前に三井住友ボランティア基金でコンテナー図書室を寄贈したエシバニニ・ジュニアプライマリーは比較的人口が多い沿岸部にあり生徒数も多い。図書室のスペースがなかったため、本棚はグレード R の教室内に設置していたことから、なかなか思うように活動が進まなかった。コンテナー図書室が設置されてからは校長のリーダーシップと司書教師の熱意で活動が軌道に乗り、ジュニアでも図書委員を配備し、現在は全クラスの生徒が図書室を利用できるようになった。蔵書はまだ不十分なので、ブックボックスの貸出しも行っている。先日同校を訪問したところ、司書教師が“新学年が始まったばかりでバタバタしているのに、生徒から早く図書室を開けてくれって言われちゃったの”と笑っていた。また、昨年 5 月にひろしま祈りの石財団からの支援でコンテナー図書室を設置したバンギビーゾ小でも図書室は生徒の“憩いの場”となっており、授業が終わると図書委員会メンバーが一目散に図書室にやってくる姿が見られる。限られたスペースではあるが、コンテナー図書室の持つ魅力と有効性を再認識している。

エシバニニ小のコンテナー図書室

学校図書活動は生徒だけでなく、司書教師をもエンパワーする機会となっている。やはりコンテナー図書室を寄贈したカンヤ高校のンバンボ先生は、授業時間以外はずっと図書室に詰めている程熱心に活動を行っており、その成果もあって同校の卒業試験の合格率も上昇している。そして彼女は今年度から司書の資格を取るべく通信教育を受けることにしたという。“自分が本当にやりたいことに目覚めさせてくれて、TAAA の活動に感謝している”と話していた。

ストーリーテリングのイベントで発表

昨年 9 月 2 日に州教育省図書担当部門(ELITS)主催の“ストーリーテリング・イベント”が隣町のウムジントのホールで開催され、ウグ郡各地域の学校が参加した。対象校からは 6 校が参加し、代表生徒が発表した。9 月 24 日は伝統の日ということもあり、伝統衣装を身につけた生徒が歌や踊りを披露する学校もあった。全体的に女子生徒の参加が多い中で、対象校のインプメレロ小（シニアプライマリー）は男子生徒 3 名が図書室から借りて読んだ本の内容をまとめ、しっかりとした英語で発表をした。イベントの後、参加校で発表を行った生徒に賞として英語の本を手渡した。対象校をこのようなイベントに招待し、生徒に発表の機会を与えてくれた ELITS のンベレ氏に感謝している。

TAAA の図書活動で育った本の楽しさを伝える“伝道師”モンドリくん

読み聞かせするモンドリ・チリザ

図書活動で大活躍しているスタッフのモンドリ・チリザくんは、以前の会報にもしばしば登場しているが、図書事業の対象校ルトゥリ高校の卒業生だ。彼が同校の図書委員だった時、いつ訪問してもコンテナー図書室の中で活動しており、“授業中じゃないのかな”と思ったこともあった。最近になってモンドリくんが告白したのだが、“TAAA メンバーやスタッフが到着したことに気が付くと、授業中でも抜け出していた”と言うのだ。
自然科学の授業中ずっと図書室にいて、授業が終わる頃に戻ってきたことに教師が激怒したそうだ。その後 TAAA のスタッフとして同校を訪問するようになったとき、その先生から“あらまぁ、好きなことが仕事になっちゃったのね”と驚かれたという。今彼は母校の後輩たちや地域のたくさんの生徒に読書の大切さ、本の楽しさを伝える“伝道師”となっている。“好きこそものの上手なれ”とはこのことなのだとモンドリくんから教えられた。図書活動も菜園活動も、情熱を持ったスタッフや指導員、関係者の力で前進している。

時間をかけてできた信頼関係

活動を通して対象校の校長や教師と友人のように親しくなれたことが喜びだ。SNS でクリスマスや年始のメッセージを交換し合い、時にはプライベートにまで話が及ぶ。活動をより良くするためにはどうしたらよいかを本音で話し合い、双方ができることを模索していく。ここまで来られたのは、対象地域や対象校を絞り、時間をかけて活動させてもらっていることで、双方の信頼関係が構築されたからに他ならない。TAAA の活動に資金提供してくださっている省庁・団体・企業、そして TAAA メンバーおよびサポーターの皆さんに改めて地域の人たちや学校からの感謝の気持ちをお伝えすると共に、事業が確実に地域に根付き、自立して活動ができる方向に向かってきていることをご報告したいと思う。

日本から来た 464 個の段ボール搬入が終わり、ほっとするスタッフたち

視察訪問からみえてきたTAAAのこれからの役割

“支援者”から“応援者”へ

久我 祐子（TAAA代表）

教師の力で読書文化が育ってきた

猛暑の日本から逃げるように、昨年8月20日から28日まで、南アフリカへ視察訪問に行ってきました。今回は学校図書支援事業を中心に視てきました。今回の訪問で実感したことは、学校の図書活動の根付きに伴って、確実に読書文化が根付いてきていることです。

対象校間で、図書活動に対する理解とサポート、司書教師の熱意や力量に差があり、図書活動が遅れ気味の学校もありますが、少なくともどの学校も「学校に図書室や図書コーナーがあって、本はいつでも手に取ることができる」状態になりました。まだまだ蔵書も図書環境も不十分ですが、TAAAが対象地域に入る数年前の「本といえば教科書だけで、読書のための本が一冊もない状態」からは大きな進展といえるでしょう。

2013年から支援を始めたカンヤ高校をアポなしで訪問しました。　昨年、高校卒業試験の合格率を前年から21%も引き上げた高校です。コンテナ図書室を訪問すると、3名の生徒が黙々と読書をしていました。私の突然の訪問にも気づかないほど集中ぶりです。

「彼らは休み時間になるといつも図書室にきて、本を読んでいるの」と司書教師のンバンボ先生は「いつも」を強調しました。こういう本の虫たちや勉強に参考書が必要な生徒たちのために、この学校は土日にも校長先生がきて、図書室を利用したい生徒たちに鍵を渡しているそうです。ゲームもテレビもない地域です。あれこれと楽しいことがありすぎて、読書だけに集中していられない都市部の生徒たちよりも、ここの読書家の生徒たちの方が読書量が多いかもしれません。

「やさしい英語の本が少ないことが悩みの種です。優秀な生徒たちはどんどん自分で難しい本を読んでいけるけど、読解力に遅れのある生徒たちは、図書室に来ません。彼らが図書室にくるように、小学生用の英語の本がほしいです」とンバンボ先生。こういう生徒思いの司書教師がいるからこそ、着実に読書習慣が育っているのだな、と改めて思いました。

あとで、TAAA図書スタッフから、ンバンボ先生（**写真：上**）も「いつも」コンテナ図書室にいることを知りました。

学校から教育省へ現場のニーズを伝える

対象地域のなかでもひときわ奥まった困窮地域にあるベキジズエ小学校を訪問しました。司書教師には会えませんでしたが、パワフルな校長先生が出迎えてくれました。「男は頭痛の種だからね。忘れなさい」と、なぜか私は男運が悪いと思っている校長先生とは、冗談を言い合う仲になっています。図書室にはTAAAからの本にまじって、州教育省から配布された本も少しありました。校長先生は、教育省地域担当者に、もっと図書を配布するようにと頼み、また、ほしい本の種類やレベルなどの要求もしたとのこと。「本の収集先をTAAAだけに頼っているのはよくないから」と頼もしい言葉を聞きました。トップダウン式に物事が進みがちな南アの社会で、学校という教育現場から教育省に情報を発信し要求を出していくのは画期的だな、さすがだなと思いました。力をつけた学校がエンジンとなり、下から上へ向かって地域の図書インフラを築き上げていく、そんな兆しを感じました。

ブックボックス大活躍

現地で8年間も活動し学校図書活動の基盤を作ってくれた移動図書館車「イテンバ号（希望号）」がとうとうリタイアし、代わりに「ブックボックス」が登場しました。学校のレベルに合わせた本を容れたクリアボックスは、一定期間各校に貸し出しされ、対象校間を巡回します。書く力を養うのも狙いなので、返却時には、生徒からブックレビューを提出しても

らうことを義務づけています。低学年は絵が中心のカードで、高学年には、レポート用紙数枚にあらすじや感想文を書いてもらいます。何枚か見せてもらいましたが、字が丁寧なのと、しっかりとした文章力には驚きました。図書スタッフのモンドリくんに聞くと、レビューの提出率はほぼ 100%とのこと。これは、今までの移動図書館車による巡回貸し出しにより、いかに彼らが図書に慣れ親しみ読書習慣が身についたかを物語っていると思います。この基盤があったからこそ、すんなりと移動図書館からブックボックスへと貸し出し方法を移行できたのだと思いました。
どの学校にいっても、ブックボックスは、学校図書室の一角に置かれていました。「今度はどんな本が来るのかな」 定期的に入れ替わるブックボックスは、生徒たちに大人気だそうです。

支援方法としてのブックボックスの魅力は何でしょうか。それはコストがかからず、やり方も簡単なので、現地の人たちが「これなら自分たちでもできる」と思ってもらえることです。訪問中に教育省図書部門（ELITS）担当者のンベレ氏とミーティングを行い、ブックボックスを紹介したところ、「これは、お金がかからないいいアイデアだ」と感心してくれました。
南アフリカの貧困地域の人たちは、長年、白人地域や都市部から、物質的に豊かな社会をみせつけられてきました。そのためか、「お金や立派な資機材、高度な技術や知識がないと何もできない」という思い込みが強すぎて、第一歩を踏み出せずにいることが多々あります。このため支援現場では、「自分たちの社会のキャパシティ範囲で、ちょっとした創意工夫で出来ること」を奨励していくことはとても大切だと思っています。地元のキャパシティをはるかに超えたやり方で支援をしていくと、逆に「自分たちではなにもできない」という思いを強めてしまいます。

移動図書館車からブックボックスへの移行は、対象地域における TAAA の現地の関わり方の移行ともいえるでしょう。現地の人たちが自分たちの力でコストをかけずに創意工夫でできるやり方を、彼らと一緒に考えていく、または応援していく。そういう協力が、今後の TAAA の役割の一部になっていくのだと、今回の視察で実感しました。

<u>支援の受け手から支援の提供者へ</u>
ここ２，３年で顕著になってきていることは、図書、菜園ともにプロジェクトの支援を受ける側が、支援をする側へと成長している姿です。　筆頭例は、TAAA 図書スタッフのモンドリくんです。TAAA 支援対象校で図書委員会の生徒だった彼は、今では TAAA 図書スタッフとして、高校での図書活動の経験を生かして、生徒たちにきめ細やかな指導をしています。この流れは在校生の間でも起きていて、先にパソコン基礎技術を学んだ生徒たちが、指導者となって他の生徒たちに教えています。教えることで彼らもまた技術を磨いていっているのです。２，３年前には学校図書室と倉庫の違いが分からなかった教師が、経験と実績を積み上げて、司書教師対象の研修ではそのノウハウを他の教師に披露するなど実力を発揮するようになってきています。司書教師研修会では、これまで外部から講師を招いていましたが、そろそろ地元のベテラン教師に講師を頼める段階になってきました。近い将来、地元の教師たち主催の司書教師研修が充実し、経験やノウハウを教え合い刺激し合うなど、学校間でしっかりとしたネットワークができると、地域の学校図書活動を発展させる力強いインフラ基盤になると思います。

菜園プロジェクトにおいては、先行の JICA プロジェクトで、コミュニティ菜園作りの支援対象者だったンギニさんが好例です。それまでこれといった仕事をしていなかったンギニ氏は、事業期間中に、菜園技術と知識そしてパッションを蓄えていき、今では、時々農業塾の講師を務めてくれるようになりました。ンギニ氏の熱のこもった指導ぶりには、TAAA 菜園スタッフも脱帽しているそうです。

これからは、「支援の受け手が支援の提供者へ」と成長していくプロセスを、今まで以上に意識的に積極的に作っていきたいと思っています。地元の生徒、教師、住民が必要としていることを一番よく知っているのが、彼らだからです。

<u>支援から応援への道</u>
今回の視察では、教師や生徒たちが力を蓄えてきて、彼らが対象地域の学校図書を支え発展させるエンジンになってきていることが分かりました。それに伴って、いつのまにか、TAAA も支援者から応援者へと少しずつ成長してきているのだと思います。しかし、対象地域は未だに、教育リソースやインフラに乏しく、これらを充実させていくのは時間がかかります。　TAAA の「支援者から応援者への道」は、今後も焦らずに丁寧に進んでいきたいと思っています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

生徒たちの書評や本の紹介（ブックレビュー）

大友深雪　訳

Nonhle Mzobe　５年Ａ

１．タイトル：ネルソン・マンデラ
２．著者：Ｇ・Ｍ　Ｊｏｂｃｌａ
３．場面：１９２３年の東ケープ
４．登場人物：ネルソン・マンデラ、マンデラの母、マンデラの父、ロバ、ジョージ・ムブケラ
５．あらすじ：まず、マンデラは５歳で、男の子がするべきことを学ぶ。次に彼は一頭のロバから学ぶ。その後両親の話に耳を傾ける。最後に学校へ行く。
６．雰囲気：本が南アフリカの英雄について語っているので、幸せな気分にさせられた。
７．教訓：家族は重要であり、家族からよいことをいろいろ学ぶべきだということ。
８．推薦：私はこの本を１０代の人たちに推薦する。彼らにふさわしい学びができるから。

Nomali Khumalo　６年Ａ

仲良しカエルとヒキガエルについてのお話の書評
タイトル：クッキー
著者：アーノルド・ローベル
主人公：ヒキガエル
場面：昔々、あるカエルの家で
登場人物：カエルとヒキガエル
あらすじ・出来事：まず、カエルとヒキガエルという名の仲良しがいた。ヒキガエルが何枚かの美味しいクッキーを焼いて、カエルの家に行った。そこで彼らは何枚か食べて止めたかったのだが、やめられなかった。次にカエルがクッキーを取り上げ、捨ててしまった。最後に２人は悲しんだ。

私が気に入った部分は、カエルがクッキーを捨てたところです。私が嫌だと思ったのは、カエルとヒキガエルが悲しんだところです。

教訓：何かを止めるべきときには、どんなに難しくても、止めること。

Bangibizo Primary

Nonhle Mzobe
Grade 5 A

1. Title: Nelson Mandela
2. Author: G M Jobela
3. Setting: The story is taking at Qunu in the Eastern Cape in 1923
4. characters: Nelson Mandela
   Mandela's mother, Mandela's Father, donky and George Mbekela
5. plot: First, when Mandela was 5 years old he learn many things that a boys must do. Secondly, a donke taught ~~tea~~ him a lesson. After that Mandela listened to his parants stories. Finally Mandela went to school.
6. Mood: The story make me feel happy because the story is talking about our hero in South Africa
7. Moralesson: The moral lesson I get from this story is that family is Important and we must learn good things from our families.
8. Recommendation:
   I recommend to teenagers because It can teach them good lesson

ブックボックスから本を借りて読んだ後、本の返却時にブックレビューを書いて箱の中に入れるよう、説明する司書教師

●TAAA の本の梱包作業・絵本のシール貼り活動に参加して

株式会社三井住友銀行

経営企画部 CSR 室　　奥住 江梨

「ぐりとぐら」にズールー語のラベル貼り

2016 年 8 月 21 日、三井住友フィナンシャルグループ（SMFG）主催の役職員ボランティアを通じて、TAAA の活動に参加させて頂きました。実は私自身、子どもの頃に南アフリカ共和国に住んでいた経験があります。当時はまだアパルトヘイトの名残が色濃く残る時期で、人種差別や貧富の差といった問題を肌で感じて育ちました。私が住んでいたヨハネスブルグでは特に不自由する事なく過ごしていましたが、学校やスーパーへ向かう道の途中に、まだ５～６歳くらいの幼い子どもが“I have no money, please help me”と書かれた段ボールをかかげ、信号で止まっている車を１台１台ノックして回っていく姿や、少し車を走らせたところに行けばバラックと呼ばれる掘立小屋がたくさんあり、電気や水道が通っていない中で生活をしている光景は、今でも強烈な記憶として焼き付いています。当たり前のように美味しく栄養のある食事を３食とり、学校に通い、友達と遊んだり勉強をする事が、実はどれだけ恵まれている事なのか、たまたま日本に生まれたというだけで、こんなにも違いがあるものなのかと初めて知った時は、いても立ってもいられない気持ちになりました。

それから時は流れ、南アフリカ共和国は目覚ましい発展を遂げてきました。しかし一方で、地方の学校には未だ図書室がなく、教科書以外の本はほとんどありません。また、幼児・低学年用の絵本が圧倒的に不足しており、子どもたちは読書習慣を育めないでいるのが現実だそうです。TAAA が力を入れている活動の１つである学校図書支援プロジェクトでは、その問題解決に取り組むべく、図書館の無い学校への図書の導入、図書室の自主運営の支援を目的とし、数多くの本を現地へ届けたり、様々な事情を抱えたお子さんでも気軽に本を読めるように、日本の絵本である「ぐりとぐら」「そらいろのたね」に現地の母語（ズールー語）訳のラベルを貼ったものを届けています。今回は、三井住友銀行と SMFG 各社から合計９名で、学校図書支援プロジェクトの一環として本の梱包作業や絵本のシール貼りのお手伝いをさせて頂きました。

作業所に入ると、まず本の多さに圧倒されます。部屋中にぎっしりと積まれている本は、なんと４ｔトラック１台分にもあたるそうです。その本を種類別に仕分け、計量をし、梱包する作業を繰り返し行いました。２時間というとても短い時間で、届けられた本の一部しか梱包することができませんでしたが、遥か遠い第二の故郷にいる人々の笑顔と明るい未来を想いながらの活動は、とても楽しく、やりがいのあるものでした。

絵本のシール貼りは、型通りにシールを切り、該当ページに貼っていくものでした。スタッフの方や、一緒に活動をしている仲間と様々な話をしながら、和気あいあいとした雰囲気の中、活動に取り組むことが出来ました。猛暑の中、真剣にお手伝いさせていただいた後、スタッフ皆さまのご厚意でいただいたルイボスティーの味は忘れることができません。

日本で何不自由なく生活していると、遠いアフリカの人々に心を寄せるのはなかなか難しいことだと思いますが、この国で起こった出来事は決して他人事ではありません。世界は今も、肌の色や宗教の違いを理由に他者を傷つけあっています。差別と正面から闘ったこの国の歴史を、そして南アフリカの今を、多くの人に知ってほしいと願います。最後になりましたが、今回の活動にあたりボランティアメンバーの受け入れ準備をしてくださった野田さん、久我さん、スタッフの皆さま、ありがとうございました。微力ではありますが、これからも南アフリカの発展に少しでも役立てればと思います。

主な活動（2016年7月16日～2017年1月15日）

〈日本国内〉

7月～1月　広報　丸岡晶
7月～1月　本などの受け取りと作業場への搬入　北爪健一
7/17　梱包作業　浅見克則　野田　鯨井幸一　久我　横山晃祐　浦和学院高校より　後藤名穂子　中川侑海　永峰大佑　大川未来　戸井田茜　渡辺秀美
7/22　本引取り　クリスチャンアカデミー　浅見
7/31　HP更新　久我
7月中　会報編集・校正　野田千香子　西村裕子　久我祐子
7/28～8/4　会報68号発送準備作業　高野千恵美　野田
8/1　本の分類作業　大友深雪　久我
8/20～29　南ア現地視察訪問　久我
8/21 梱包作業　浅見　丸岡　野田　西村　横山　三井住友CSRより　奥住さんほか6人
8/29　会報68号を郵送　野田
8/30　日本ＮＧＯ連携無償資金協力申請書提出　久我
　N連中間報告書提出　久我
9/5　南アへ出荷（本16729冊　算数セット126　ボール85）　野田　大友
9/7　HP更新　久我
9/18 梱包作業　大友　横山　西村　高野　野田　坂本由香里　坂本優奈　井上直子　井上瑚舶　井上銀河　浦和学院高校より　梶原知華
10/1　JICA第2四半期報告書提出　久我
10/4　berkane出店レセプション　久我　野田
10/6　ひろしま・祈りの石国際教育交流財団へ第2四半期報告書提出　久我
10/11　N連外部監査　経理報告訪問　久我
10/16　三井住友銀行ボランティア基金報告書提出　久我
10/16 梱包作業　野田　大友　久我　高野　加賀知子　加賀快晴　浦和学院より　鈴木涼太　川上祐樹
11/5　本の分類作業　大友　久我
11/11　ひろしま祈りの石国際教育交流財団へ申請書提出　久我
11/16　JICA経理・事業説明会　出席　久我
11/20 梱包作業　浅見　野田　西村　高野　浦和学院高校より　宗野友一郎　田中裕子　佐々木信行　尾崎啓郎
11/29　HP更新　久我
12/9　N連案件選定会議　外務省　平林　久我
12/9　本の種分け　種分け作業　大友　加賀知子
12/14　JICAキックオフミーティング　平林　久我　野田
12/17　作業・忘年会・報告会　平林　久我　川上　大友　丸岡　津山カヤ　野田　浅見　横田雅史
12/20　算数セット勉強会・川崎市末長小学校　平林 大友　久我
12/26　ミーティング　平林　久我
12/28　作業場段ボール、英字新聞、多国語書籍廃棄　浅見
1/3　JICA第3四半期報告書　提出　久我
1/15　梱包作業・会議　浅見　丸岡　下谷房道　野田　高野

☆ルイボスティのご紹介☆

ルイボスティ茶は南アの西ケープ州だけでとれる健康茶です。1パックでヤカン1杯、作れます。
1箱80パック2,000円です。（送料一律500円。5箱以上送料無料）お申込みは、ＴＡＡＡ事務局へ。

〈南アフリカ共和国〉　平林薫と南アのスタッフ

7/18～22　学校指導と本寄贈、JICA 有機農業塾事業開始。指導員との打合せ、地域住民との会議、農業塾敷地整備等。
7/25～29　学校訪問指導、農業塾カリキュラム及びマニュアル作成、敷地整備と育苗所設置、指導員のエナレ二農場研修。
8/1～5　学校指導、IT プログラム司書教師研修会。農業塾敷地整備、備品購入等。
8/8～12　学校図書指導　農業塾敷地整備、トレーニングコース準備、地域住民との会議。
8/15～19　学校指導と本寄贈　案内配布。
8/22～26　久我代表と学校訪問、スタッフ会議、N連申請書準備、農業塾トレーニングコース準備、カウンターパートと会議。
8/29～9/2　学校図書指導、IT プログラム筆記テスト。農業塾開始。州教育省図書部門イベントに出席。
9/5～9　学校図書指導　図書イベントに参加した学校を訪問本の寄贈。IT プログラム筆記テスト。本の仕分け。農業塾トレーニング、地域住民への有機農業研修。
9/12～16　学校指導と本の寄贈、IT テスト採点。14日にシノクボンガ中のキャリアガイダンスイベント出席。農業塾準備。地域住民への有機農業研修。
9/19～23　学校図書指導　IT 実習。農業塾トレーニング、地域住民への有機農業研修。
9/26～30　学校訪問と本寄贈、IT 実習。農業塾トレーニングとエナレ二農場研修、米国からの留学生に農業塾の活動紹介。
10/3～7　ブックボックスの整理と準備。農業塾実習テスト、エナレ二農場研修、地域住民への有機農業研修。
10/10～14　学校巡回訪問指導（図書）、IT 実習。農業塾筆記テストと卒業式。地域住民への有機農業研修とモニタリング訪問。
10/17～21 学校巡回訪問指導（図書）、ブックボックス貸出し、IT 実習、20日にカンヤ高でのキャリアガイダンスイベント出席。農業塾第2回トレーニングコース開始。地域住民活動モニタリング。
10/24～28　学校巡回訪問指導（図書）、州教育省図書部門ンベレ氏と会議、ELITS への本の寄贈、IT 実習。農業塾トレーニング、保育園での有機農業指導準備。
10/31～11/4　学校巡回訪問指導（図書）、本の寄贈、IT 実習。農業塾トレーニング、保育園での有機農業指導。2日に日本大使館草の根協力担当タンディさんがムタルメ小訪問。
11/7～11　学校巡回訪問指導（図書）、IT 実習。農業塾トレーニング、地域住民および保育園での有機農業指導。
11/14～18　学校巡回訪問指導（図書）、IT 実習。農業塾トレーニング、地域の学校を訪問し、休暇中の生徒対象プログラム準備、エナレ二農場研修、保育園での有機農業指導。
11/19　日本から届いた本をオフィスに搬入。
11/21～25　学校巡回訪問指導（図書）、IT 実習、24 日にムタルメ小卒業式出席。農業塾トレーニング、地域住民活動モニタリング。
11/28～12/2　学校巡回訪問指導（図書）、ブックボックス返却、IT プログラム参加生徒のうち、合格者の確認と修了証書の発行。農業塾テストと卒業式。
12/5～1/6　日本に一時帰国
1/9～13　学校巡回訪問指導（図書）、小学校用本の学校別仕分け。ヒバディーン図書館に本の寄贈。農業塾敷地整備、備品の購入と準備等。